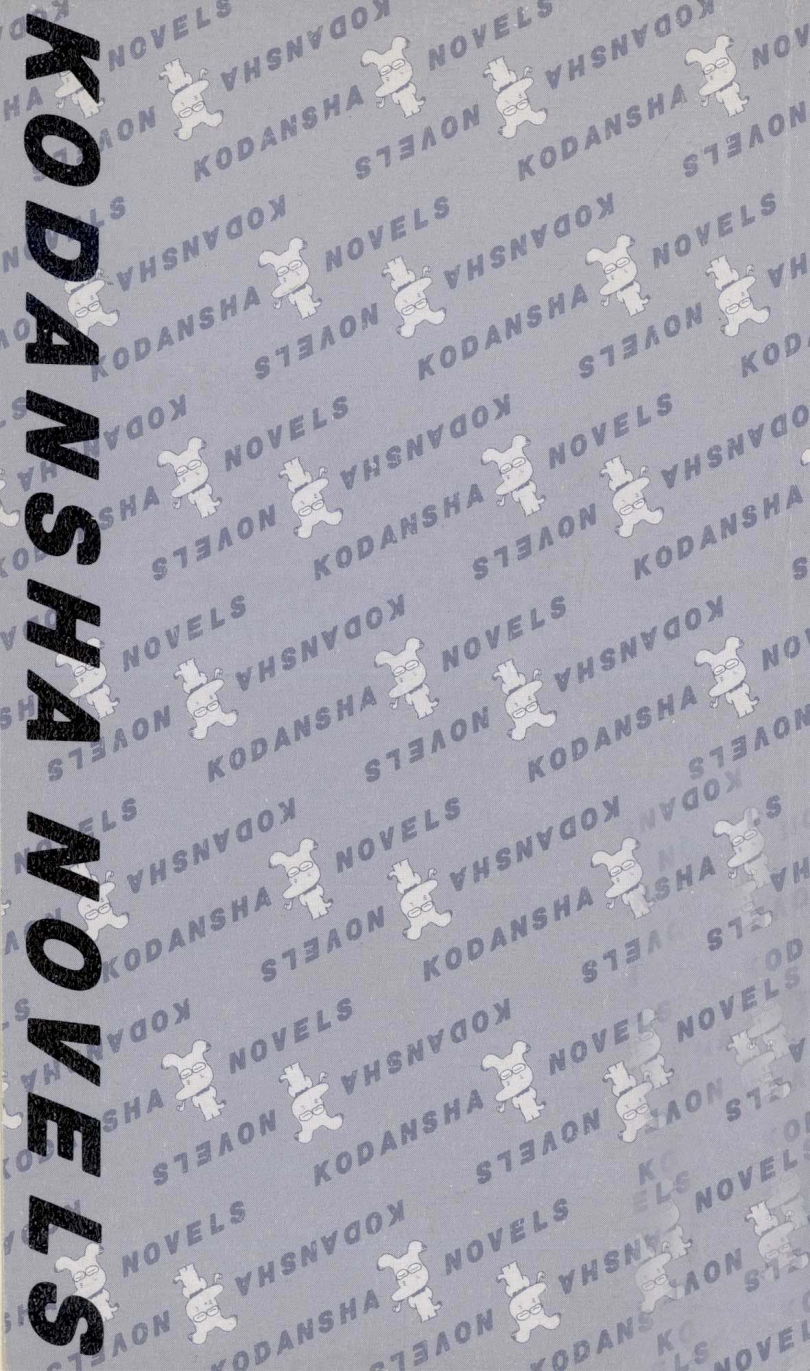




裏六甲異人館の惨劇

昭和六二年九月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六八〇円

著者—梶 龍雄 © 1987 TATSUO KAJI Printed in Japan

発行者—加藤勝久



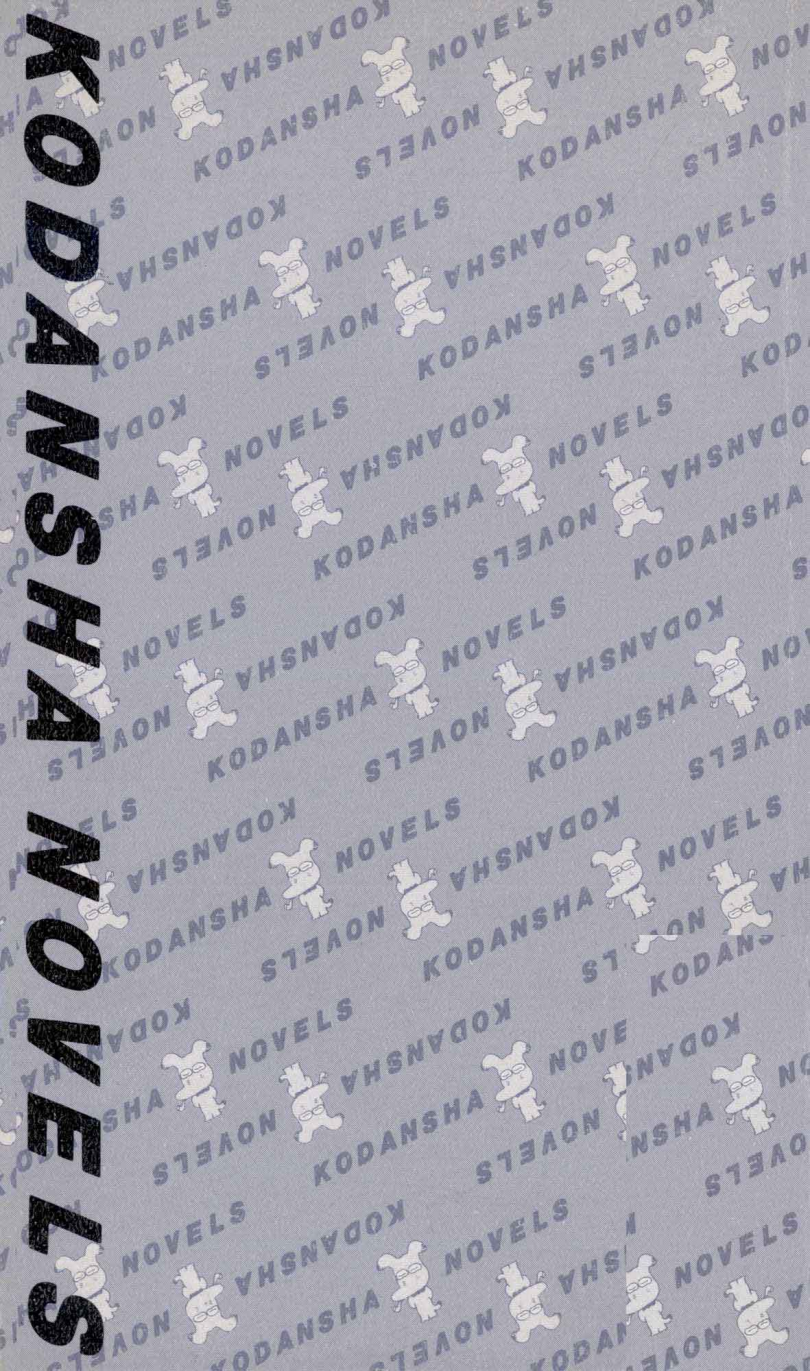
発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二 郵便番号 一一一 電話東京(〇三)・九四五・一一一(大代表)

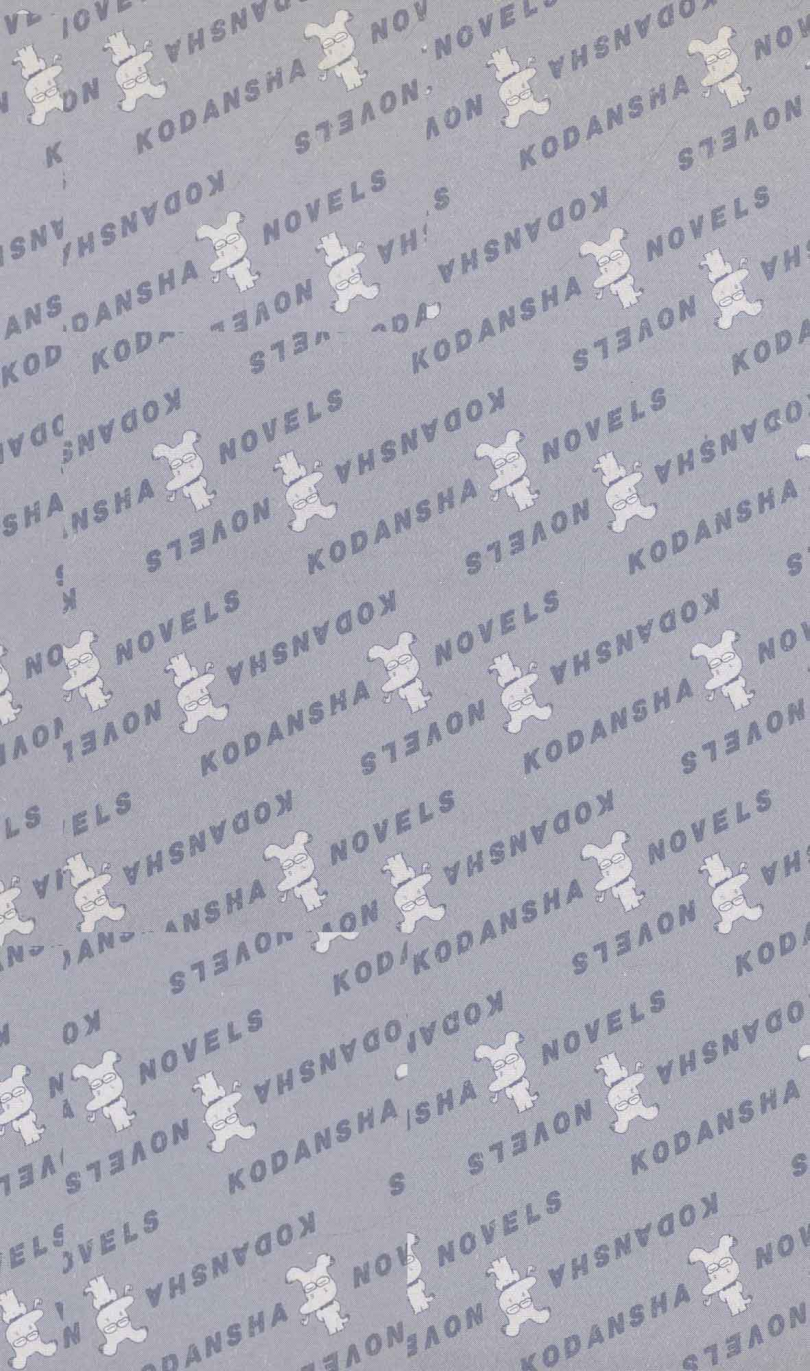
印刷所—株式会社廣済堂

製本所—大口製本印刷株式会社

落し本・乱し本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。







# 裏六甲異人館の惨劇

龍雄

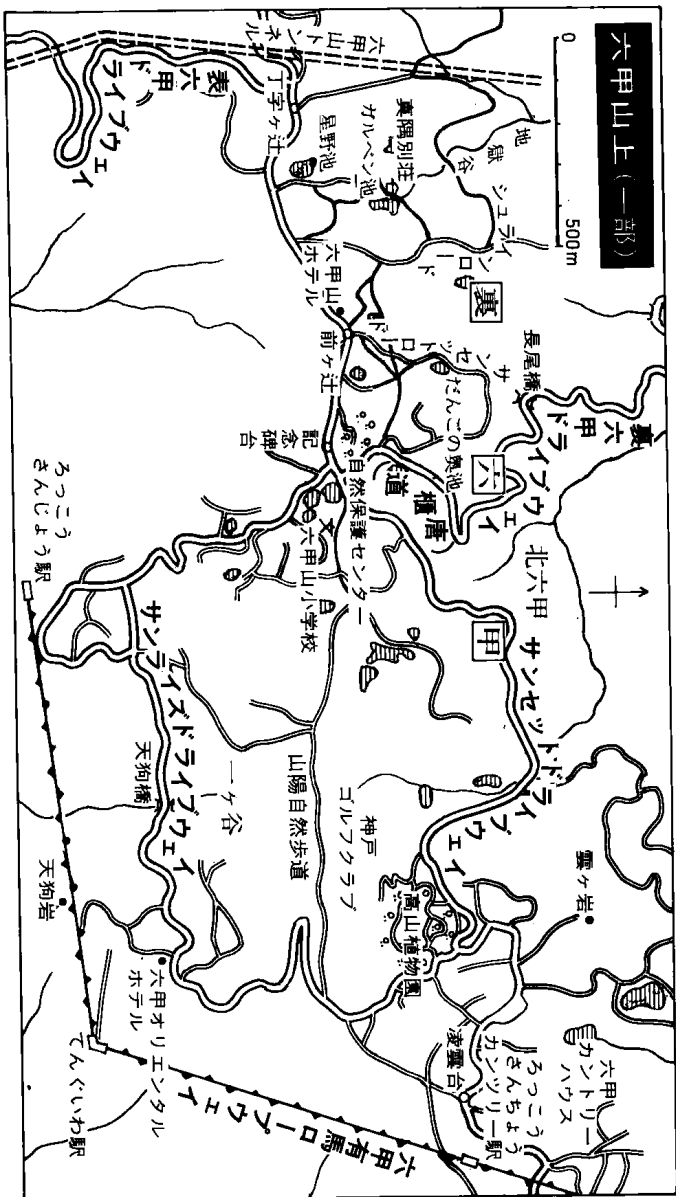
ODANSHA 講談社  
ノベルス NOVELS

ブックデザイン 熊谷博人  
カバーイラストレーション 野中昇  
本文イラストレーション 野中昇

目次

|     |          |     |
|-----|----------|-----|
| 序章  | 醉夢の目撃    | 7   |
| 第一章 | 黒真珠夫人    | 22  |
| 第二章 | 霧にむかつて   | 57  |
| 第三章 | 真隅家の構図   | 77  |
| 第四章 | シミュレート搜索 | 119 |
| 第五章 | 霧の中で     | 150 |
| 終章  | 青嵐定まるとき  | 202 |

六甲山上(一部)





## 序章 醉夢の目撃

夜の暗がりをおバックに、光が綾なす空中を翔ぶ……と  
いつても、天高くというのではない。地上をやや浮き上  
がった所を翔ぶ……そんな感覚を、吉田早人は楽しんで  
いた。

かなり酔ってきたなという分別ふんべつがあつたのは、もう  
四、五十分前のこと。その時には、たまにはこういうこ  
とがあつてもいいのだという、解放された気分を意識し  
ていた。

だが今は、酔いそのものの中の人。タクシーにいるこ  
とも、そのタクシーがどこに行くのかということもほと  
んど忘れていた。

上に行け！ 山に行け！

なんだか知らないが、彼は頭の中で、そんな言葉を馬  
鹿に楽しくくりかえしていた。

酔ってるな、ひどく酔ってるな……と思う、その意識  
も心地良い。

眠たい、ひどく眠たい、と思ひながら、甘いだるさに  
包まれた体と意識を、そのままの状態にあずけて、別に  
眠ろうともしないのも、また悪くない。

これが仕事のさいちゅうに襲ってくる眠気なら、眠ろ  
うとしないことが、ただただ苦痛にちがいない。だが、  
今すぐここで眠りこけてもいいとなると、妙に享樂きやうらく的  
な感覚に、楽しい感じなのだ。

吉田は映画の助監督。

“監督”という字の頭に、“助”という字がつくだけで、  
その仕事は天国と地獄ほどの大違い。

要するに、助監督は雑用スーパーマン。突然、監督が  
カメラの横で、衝動的に欲しいと言ひ出した大道具や小  
道具を、奇術師まがいに出現させる。

いや、物ばかりではない。人だって動物だって、なん  
でも都合する。

本物の乞食を向うに歩かせたいと監督がいえば、すぐ  
にも見つけてくる。豚を持ってこいといえ、どこかか

ら荒縄の先に引っ張って現われる。北極熊だって、引きずって来そうないきおいである。

そして奇術師同様、取り出すことも得意なら、消すことも得意。カメラの視野にじまになる、植木や電信柱を消してしまう交渉にも敢然として立ち向かう。時には住宅でさえ、あつという間に……とはいかないが、ともかく消してしまうことだってある。

そして、その上に、ロケのための警察への届け出、地まわりのコワイお兄さんがたとの交渉、そうかと思うと、ドベタな役者に、監督の癖を嘸<sup>ふ</sup>み込んだ、ちよいとした演技のコツの耳打ち。

また、スタッフの弁当の心配をしたり、機材運搬車の到着遅延に気をもんだり……。

体ばかりではない、智慧も気力も神経も、使いつくすだけ使って、外面は楽しげなスーパーマンでいるというのが、その商売だった。

だから、たまには、こんなチャンスに、ただもう酒の中に溺れたいという気分にもなろうというもの。

ともかく、いい気分だった。

窓外の町の光は、次つぎと後ろへ飛び去り、飛び去り、しだいに光と色の饗宴を減退させた頃から……。体が軽く後ろにのけぞり、背中がシートの背に軽く押しつけられる感覚が強くなってきた。

どうやら車は、山へとのぼる勾配<sup>こうばい</sup>にさしかかったようだ。

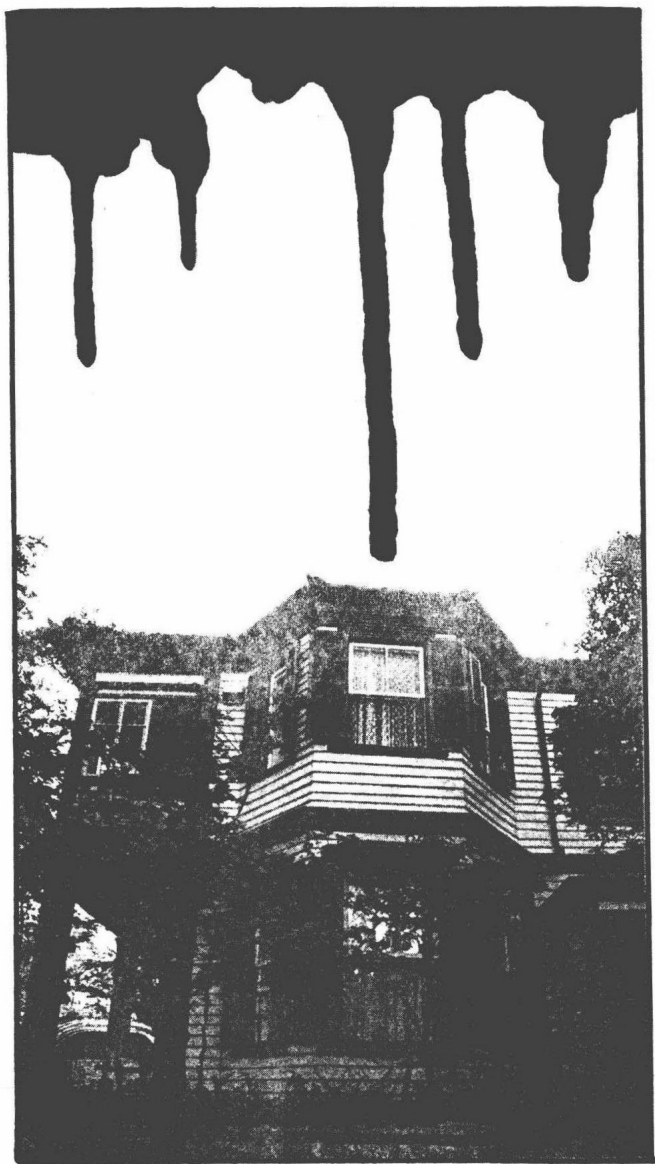
シートにあおむけに寄りかかったままの姿勢で、首を動かさず、横斜めの視線で外を見る。窓外に見える世界は、ごく限られたもの。

青を微かにこめた夜空の闇。その中を、街路灯とか建物のシンプルな光が、時おり、後ろに飛び去るだけになる。

道の<sup>のぼ</sup>上りはますます急になったのか。背中がそれとなく後ろに引かれる感じ。それが酔いをますますひっかきまわし、ますますいい気分になって……。

そのあたりで、さすがに、うっとりとした眠りの中に、意識が溺れて行ってしまったらしい。

運転手の声に、その眠りの中からふと浮き上がって、なにか答えたような感じもするが、また眠りの中へ



……。

次におぼろに眠りからさめた時には、自分のふらふらと横揺れする体は、地上に二本の足で立っているのを知った。

闇の中に、蒼白な月光が溢れている。

その中、目の前に、異人館がひっそりと建っていた。

「異人館だ！ 月光の中の異人館！ メルヘンだあ！」  
そんなことを胸につぶやいたかも知れないが、良くはおぼえていない。

ともかく、焦点の定まらない目に、ポツと点ったオレンジ色を暖かく見て、それにむかって誘い込まれるように酔歩を運び出し、三、四歩……。

音……いや、声があがったので、今度はそれにむかって歩き始めたような気がする。

そして中を覗いた。部屋の中を……。

どうして、唐突に部屋の中を覗くということになってしまったのか、良くはわからない。その間の意識の流れにも、かなり空白がある。

ともかく、中は……つまり部屋の中は、注ぎ込む蒼白

な月光に、うつすらとしたモノトーンで、そこにこちらに背をむけた人影……。

その人影は、細身にすらりとして、やや前かがみの姿勢……。

それがのびあがって、ふり下ろした手を、ふたたび体の横にもどしたという感じ。ということは、けっきょくその人影が、手をふり下ろしたところも、見たのだろうか……。

その人影の前に、いま一つの人影が……。しかもその人影はほとんど、二つ折に身を縮こまらせて、下にむかって、うずくまってい……。

半ばまだ酔いしれた眠りの中にある感じで、突然、吉田早人はそれが殺人だと感じた。ひょっとしたら、背をむけて立つ、そのすらりとした人影の手に持たれている物は、斧か？

必死にそこに焦点を合わせようとするが、まったく合わない。

だが、なにか殺人のような……。

にもかかわらず、吉田はそれに恐ろしさも、パニック

も感じなかった。

それを映画の場面のうに受け止めて、すごいシーンだ、これはうまくいっているぞと感じたのは、彼が映画人だったためだろうか。

いいぞ、そう、その調子……。そんな気分で、ふらふらと体をゆすりながらそれを眺めるうちに、開いたドアのむこうから射し込んでくる廊下からの照明に、その斧……おそらくは、そうだと思われるものを持った人影は、その廊下のほうに歩み出した。

その瞬間、その光の中に、いま一つの人影が横切ったのを見た気もするが、それは確かではない。

「殺しの場面として、上出来！ はい、お疲れさま」  
そうつぶやいたとたんに、どっとまた眠気に襲われた。

吉田早人はふらふらと腰を落すと、また眠ってしまったような……。

がらんとして、いたずらに照明だけが明るい、六甲署の正面大事務室。その中に、四、五人の人影がばらばら

と散らばっているだけ。

人影はデスクにむかって、仕事に熱中しているように見せて、それとなく自分のほうに、注意をしている。秋藤警部補には、そう思われてならなかった。

自分の思い過ごし、いささか被害妄想気味だと、考えなおそうとした。だが、どうしても、その思いを完全にふり払うことはできない。

季節はゴールデン・ウィークが終わったばかりの五月の初旬。もう夜も寒くはなくなっているはず。なのに、彼はなにか、身のまわりに薄寒さうすさむが忍び寄ってくるのを感じる。

警察官としてのコースを踏み出してから始まった、いつもの孤独感が、今夜はまた、ひしひしと身にしみる。

刑事課捜査刑事として、彼の初めての当直勤務であった。

実際のところ、秋藤は署に出て来るまでは、さほどの大きな事件もなく、無事平穩の一夜が明けてくれれば、もうそれでいいと思っていた。

だが、こう孤独な疎外感に包まれると、なにか事件が

起きてくれるほうが、まだ身の置場が見つかるような氣持ちにさえなってきた。

ただし、事件は輕微なものであつてほしい。

刑事課に配属されたのが、つい五日前。昼間勤務で、署の先輩刑事の後のついで、いくつかの捜査や聴き込みで、そのノウ・ハウを少しは知った。だが、自らおこなうといった捜査には、まるで未経験。

いささかでも大きい事件が起きたら、どこからどう手をつけていいか、当惑するしかなさそうだった。

そして、へたをすれば、現場のノン・キャリアたちから、ひそかな嘲笑と、輕蔑の視線を浴びせられるのがオチ。また彼等は、その期待を持って、秋籐のようなキャリアー組を見ているのだろう。

大学卒で、国家公務員試験をパスして、警察畑に入ったキャリアー組は、警察大学で三カ月の教育後は、巡查、巡查部長を飛び越えてすぐに警部補。

それからわずかの実地訓練と、警察大学での初任幹部教育を受けて試験にパスすれば、もう警部。

警察行政の中の行政官としての、特別の存在ではある

う。

しかし、現場叩き上げの警察官は、警部になるのに、昇任試験を何度も受け、十年、十五年かけなければならぬ。

その警部の上の警視ともなると、現場組にとっては、もう雲の上のような話。

平巡查から始めて、三十年勤め、五十の歳に警視役になった叩き上げ現場警察官などは、異例の話となつていくくらいだ。

現場組はこれらのひと握りのキャリアー組を、自分たちとはまるで関係ないことと、よそよそしく見ているのがほとんど。中には嫉妬と反感をまじえて、冷たくきびしい目で見る者もいたが、それはごくわずか。

まだ学生臭い青っぱさを尻尾につけた、秋籐警部補である。それだけにストレートな純粋性を持っている。そういう環境の中に放り込まれては、孤独にならざるをえなかった。

ただいささかの一つの救いは、この六甲署の勝倉署長（かつくら）が秋籐と同じ大学の先輩で、それとなく氣を配ってくれ



ているような感じだったことだ。

キャリアー組の実地訓練警察官は、普通は警邏<sup>けいろう</sup>か交番勤務というところなのに、刑事課にまわされるといいうささかの異例扱も、なにか署長のタッチが感じられた。

しかしこれは秋籐にとっては、実のところ、ありがた迷惑。それよりは気楽な交番勤務あたりのほうが嬉しい気持ちであった。

署に実地訓練のために配属されてすぐ、秋籐は勝倉署長の前に呼び出された。

署長はえびす様とひそかに渾名<sup>あだな</sup>されているとか。見るからに人がよさそうな、少し肥り気味の人物。だが、やはりそこはキャリアー組。なかなか油断ならないものを隠しているという評判だった。

「現在の君がどういう気持ちでいるかは、私にはわかる気がする。こういう役職だ。私だって、君と同じコースの組だからな。だから、いっておこう。まわりの人間のこととは、あまり気にするな。君には、君の行く道があるということ、いつも信じていたまえ」

「まわりの人たちのことを気にするなといいますと、や

はり……その……現場の人たちは、なにか特別の目で、僕を見ているのでしょうか？」

秋籐はおずおずとたずねかえした。

「多かれ少なかれ、そうだろう。だが、我われと同じコースを踏んだ連中は、けっきょくはみんな、そういう気持ちで、そのあたりを通過してきたんだからな」

秋籐はそれだけで、少し気が楽になった気がした。

署長は続けた。

「しかし、君がたいへんなのは、むしろその管理職になる、これからだよ。それからは、けっきょくは人と人との関係とかつきあい、ぜんぶの仕事となるんだ。頭も使えば、気もつかう。そういう意味では、今、現場の活動をひととおり観察、理解しようとする実地訓練期間のほうが気楽ともいえる。秋籐君、そう思って、あまり緊張したり、肩をいからせたりしないで、気楽にやることだ」

その時には、秋籐も良く理解し、署長のいうようにやっていこうと決心したつもりだった。

とはいうものの、具体的に現場の空気を吸い、泥もか

ぶれば、そこは生身の人間。

時に動揺し、不愉快も感じれば、おちこみもして……しだいに自信を喪失し、孤独を感じて……。

そんな時だ。目の前の電話が鳴った。七時二十分だった。

取り上げると、当直の電話受付の巡査の声が、飛び込んで来た。

「署長が、外からだ。当直の刑事課の刑事ということだ」

あの配属当初の訓話以来、秋籐は署長とは話していない。

秋籐は慌てて、つながった声に答えた。

「秋籐警部補です」

「ああ、君か。そいつはちょうど良かった。事件だ」

「はあ……」

秋籐はちよつと状況に困惑して、曖昧な答をした。

事件が起きると、署長が署の刑事課の刑事に電話してくる……そういう手続というか、形態が、実際の捜査活動があるのだろうか？

勝倉署長も秋籐の当惑を、いちはやく理解したらしい。

「いや、たまたま、私が現場に居合わせるといふ奇妙なことになってね。それで、私から電話しているんだ。事件は殺人……いや、正確に言えば、まだそうはいえないかも知れないが、ともかく変死体が発見されて、しかもそれが、現場で死んだのではないよう……つまりは運び込まれたというのか……」

新米刑事の秋籐に、具体的に答える言葉はなかった。

「はあ……」

「それに、やっかいなことに、その現場というのが、大学の教授で、県の公安委員会の委員の一人の、裏六甲の別荘というんで、取り扱いがいろいろとむずかしくなりそう。真隅重弘さんというんだがね。いや、たまたま私は真隅さんに招待されて、その別荘におうかがいしている時、事件が起きたんだ。詳しいことはこっちで話す。今のところ、ことはできるだけ隠密にして、捜査の進みぐあいで、今後の方針を立てよう。ともかく、ブン屋さんに嗅ぎつけられず……」

「はっ、ブン屋？」

「新聞記者だよ。彼等に気づかれず、すぐ当直の刑事課の刑事と何人かの調査を同行の上、君はすぐここに来てくれたまえ。鑑識とかその他の連中の手配は、署にいる誰かに頼みたまえ。そう、玉置刑事課長だが、もちろん帰宅したんだろうな？」

「はい、そうなのですが……」

「彼にも連絡を入れて、そう、署の方で待機しているように伝えてくれ。ともかく、たまたま現場に居合わせたということもあるし、良く知ったかただから、私がとりあえずは指揮をとる……」

「あの……死体は殺人で、運び込まれたとか……なにか、そういうことをおっしゃいましたが、つまりはやっぱり殺人事件なのですか？」

「と思うがね。私もそう詳しいことはわからない。ともかく、死体は頭をめちゃめちゃに叩き割られているんだ。しかし、私の経験から見ても、殺人現場はその死体のあったその部屋ではないような、そんな感じだ。しかし、詳しいことは鑑識の連中や、検死医の判断を待たな

ければならない。現場は裏六甲といわれる地点、丁字ヶ辻と前ヶ辻の間の道を左に入った、地獄谷の源流のあたり……真隅さんの異人館の別荘といえ、署のおおかたの奴が知っているはずだ」

「わかりました」

身の置場に困って、そこから逃げ出す事件を、心ひそかにねがっていないでもなかった秋籐警部補だ。

そのための事件にしては、あまりに大き過ぎる感じもある。だが、ありがたいことに、署長が偶然、現場に居合わせているというのだ。

秋籐警部補は七時二十二分をさしている腕時計を、ちらりともう一度見てから、まずは署内への事件の通報と手配からとりかかり始めた……。

「なんだって!? すると、君がその泥酔したおぼろな意識で見た、二つ折りに倒れて動かなくなった人影というのは、現実には、殺された人間だったのかい？」

五城秀樹は受話器を持ってからも、まだ目をはなさなかったデスク上のシナリオから、初めて視線をあげた。